

11) 術前予想と異なる所見のため clipping に苦勞した前交通動脈瘤の1例

森 修一・曾我 洋二 (水戸済生会総合)  
北沢 智二・早野 信也 (病院脳神経外科)

症例は、31歳女性。数カ月前に頭痛・嘔吐の episode があつた。平成8年9月23日就寝中に強い頭痛が出現し嘔吐した。近医を救急受診し、SAH を疑われ当科に紹介入院。CT では suprasellar cistern から anterior interhemispheric fissure にかけて軽度な SAH を認めた。Angiography で ACom complex に動脈瘤を認めたが、Rt. A1A2ACom と Lt. A1A2ACom に neck を有する2個の脳動脈瘤であつた。側面像では互いの dome の先端が接しているようにもみえた。また A1 は左が dominant であつた。術前神経学的には、項部硬直と強い頭痛のみであり、Hunt and Kosnik grade 2 であつた。

左前頭側頭開頭により pterional approach で行つた。脳表は比較的強い SAH を呈し brain は voluminous であつたが、liquor の流出は良好であつた。Lt. A1 に沿つて ACom complex に至ると、Rt. A1A2ACom An. の周囲には clot が多く存在し adhesion も強かつたが、Lt. A1A2ACom An. にはあまり clot は多くなかつた。Ruptured site は、Rt. A1A2 An. であつた。

これらの動脈瘤の dome は互いに tough に adhesion して、ACom と2つの dome の間に2個の clip を入れる space はなかつた。このような状況を術前 Angiography からは予想しておらずどのように処置すべきか悩むことになつた。結局のところ Rt. A1A2ACom An. の dome に clip をかけ2つの dome を separation して各々に neck clipping を行つた。術後経過は良好であり1カ月後に神経学的異常所見なく退院した。

術前 Angiography の注意深い読影を痛感した1例であつた。

12) 脳動脈瘤に対する脳血管内手術

伊藤 靖・玉谷 真一  
熊谷 孝・阿部 博史  
皆河 崇志・竹内 茂和 (新潟大学)  
田中 隆一 (脳神経外科)  
小池 哲雄 (新潟市民病院)  
(脳神経外科)

【目的】脳動脈瘤に対する脳血管内手術の手法、注意点につき検討した。

【方法】対象は、脳血管内手術で治療を行つた脳動脈

瘤62症例(64動脈瘤)である。detachable balloon (DB) 及び interlocking detachable coil (IDC) による親血管閉塞術を39例(40動脈瘤)、IDC による動脈瘤塞栓術を23例(24動脈瘤)に施行した。

【結果】全症例で術中破裂は認めなかつた。親血管閉塞術は、DB を使用する場合、安全を期するため、原則的に造影剤、HEMA、造影剤の順に充填した3ヶの DB を使用した。閉塞を行える血管の範囲が狭い症例には IDC が適するが、coil migration 等を起こさぬよう適切な径の選択が必要である。IDC による動脈瘤塞栓術では、まず shell となる動脈瘤径にはほぼ一致した IDC を挿入し、その後各種 size の coil を挿入した。しかし IDC が detach の瞬間に思わぬ動きをし、親血管内に migration する場合があります。retriever による回収や microballoon による reposition が必要となる。また塞栓時 microballoon の併用による migration の予防も有用である。wide neck 症例においても microballoon を併用した neck plasty が必要となる。また瘤内の coil が密になると、detach 後 arm 部が、すでに瘤内にある coil に引っかかり coil を引き出してしまふ可能性もあり注意が必要である。以上の手技及び注意点を中心に VIDEO を提示する。

【結論】親血管閉塞術は、症例により DB 及び IDC のどちらを使用するか検討が必要である。IDC による動脈瘤塞栓術は、正確に十分な塞栓を行うには、neck plasty 等の strategy を考慮する必要がある。

第7回新潟外科系領域  
バイオメディカル研究会

日時 平成8年6月28日(金)  
午後5時45分～8時  
会場 新潟グランドホテル  
3階 悠久の間

I. 一般演題

1) 異種神経移植によるパーキンソン病治療の試み

大倉 良夫・小田 温  
渡辺 徹・小野 晃嗣 (新潟大学脳研究所)  
吉田 誠一・田中 隆一 (脳神経外科)

【目的】ヒト胎児脳組織を用いた神経移植は既にパー